## 企業インタビュー

# 株式会社リクルート

## 新卒事業本部　大谷康人

昨年、日本経団連によって新卒者の採用選考に関する企業の「倫理憲章」が一部見直された。それによって、2013年度卒業生対象の就職活動は大きなスケジュール変更が行われた。この変更は、就活生にどのような影響を及ぼしたのか。また、これから始まる就職活動に向けて、学生はどう立ち向かえば良いのか。不安に感じている学生も多くいることだろう。そこで、今回我々は株式会社リクルート新卒事業本部の大谷康人さんに話を伺った。

**Q 2013年度卒業生対象の就職活動について、スケジュール変更における影響などを教えてください。**

A 既にご存知の方も多いでしょうが、2013年度卒業生対象の就職活動より企業の広報活動開始時期が10月1日より12月1日に変わりました。従来であれば、10月1日からのスタートを皮切りに、企業訪問、説明会への参加、企業同士の比較や取捨選択等をじっくりと行い、その後のエントリーシートの提出や4月から本格的な選考期間に備えます。しかし、今回広報活動開始日が12月1日となったにも関わらず、選考時期が4月と従来と変わらなかったので実質企業と学生が接触できる期間が約6ヶ月から4ヶ月に圧縮。結果かなり慌しいスケジュールを強いられた就職活動生が多かったのではないかと思われます。

明確なことは言えませんが、この圧縮されたスケジュールが影響してか学生一人あたりの企業エントリー数も減少し（※リクナビ2013調べ）、もう少しじっくりと企業を見たかったという学生も少なからずいたのではないかと推測をしています。

**Q 2014年度卒業生対象の就職活動の動向について教えてください。**

A 就職活動の流れに関しては現在のところ、みなさんの先輩にあたる2013年度卒業生対象の就職活動スケジュールと大きな変更はないのではと予想しています。

我々が調査したデータを見る限り、説明会や選考の開始時期は一部の企業を除いて従来通り変わらないと回答している企業が多いことから、おそらく同様のスケジュールである可能性が高いでしょう。圧縮された期間の中でいかに準備が整えられるか、たくさんの企業と出会えるかが鍵となります。

また、巷では「就職環境の悪化」や「就職氷河期」という厳しいワードばかりが取り上げられがちですが、あながちそんな側面ばかりではありません。今年リクナビ2013では掲載企業数が数年ぶりに1万社を超えるという嬉しい出来事がありましたし、この時期でも採用活動を継続している企業もあります。限られた活動期間ですが、どうか悪い噂ばかりに捉われず視野を広げて前向きに活動をして欲しいと思っています。

**Q 企業を選ぶポイントを教えてください。**

A 同じ業界、同じ職種であっても、企業が違えば仕事に対する考え方が違うこともあります。例えば、SEという職種一つとっても、金融系のSEなのか、ゲーム制作会社のSEなのか、どんなものを構築し誰に対して提供するサービスなのかで社風や仕事に対する考え方・求められるスキルが違ってきます。

また、企業を選ぶ際には一般的に仕事内容や福利厚生、扱っている製品といった情報を参考にする方も多いですが、「仕事の任され方」などを考慮する人もいます。新人研修や勉強会を通し一人前になるまでじっくり時間をかける企業もあれば、最低限の研修の後すぐに現場に配属され失敗や成功を経験させて育てていくという企業もあります。これはどれが良い悪いという問題ではなく、合うか合わないかの問題です。これからみなさんは長く働くのですから、どうか色んな角度で企業を比較して下さい。

**Q 大学院に進学することは就職活動において有利に働きますか。**

A 一概には言えません。ただ一言お伝えしたいことは「就職に有利か不利か」という基準のみで進学の可否を判断しないこと、でしょうか。例えば具体的に「将来○○という業界（企業）で△△という仕事をして、××を実現させたい。その為には大学院で～～という研究を行い、専門性を深める必要がある」というように明確な目的意識があって進学をするのであれば企業は評価するでしょう。事実企業によっては、研究開発部門で活躍するためには、在学中にこれくらいの専門性とスキルは修めて欲しい、など基準を設けている企業もあるので、明確に照準を合わせるのであれば進学することはプラスに働きます。あるいは、早く社会に出て経験を積みたいと考えるのであれば学部卒で就職をした方がその人にとって良いケースもあります。みなさんの夢や将来就きたい仕事、実現させたいこと。それを叶えるためには何が必要なのか、そこから考えると自ずと答えはでるのではないでしょうか。ぜひ一人では悩まず、周囲の先生や先輩、時には卒業された社会人に相談して考えて欲しいです。

**Q 専攻する分野以外への就職活動について注意すべき点は何ですか。**

A 勉強してきた専門分野を直接生かせなくても、これまで経験してきた研究のプロセス、自分の理系的な思考観念がどのように仕事に生かせるのかを、明確に提示できることが必要だと思います。また、畑違いの職種であればあるほど、その仕事に対する理解はしておいたほうがいいです。単純にイメージだけで仕事を選んでしまうと、入社後にギャップが生まれてしまいます。

**Q 自己分析の仕方について教えてください。**

A 自己分析とは一般的に「自分の過去を振り返り、志向や行動の傾向を探る」というやり方がポピュラーですね。

ただ、それ以外にも「企業を見ながら自分の価値観に触れる」自己分析もあります。これからみなさんは様々な企業と出会うかと思いますが、中には興味が持てる企業もあればそうではない企業もあるでしょう。「何だかおもしろそうだな」「気に入った」はたまた「今一つ興味が持てなかった」例え漠然であっても色々な印象を抱くはずです。その際、そう感じた「理由」を具体的に言葉や文章に表してみて共通項を探っていくと、自分自身が何を重要視しているのかが見えてくるケースもあります。これまで業界や仕事内容で選んでいたが、実は「働いている人」で判断している自分がいるな、など気付けていなかった自分の価値観や軸をはっきりさせることができます。ずっと机に向って自分の過去と向き合い続けるのも大変なもの。そんな時は外に出て色んな企業の話を聞いてみましょう。

また、近年は自己分析に関するアセスメントも充実していますので、それらを活用して新たな自分の可能性に触れるというのも有効でしょう。リクナビの中にも「リクナビ診断」という自己分析コンテンツがありますので、ぜひ試してみて下さい。

**Q 他己分析の仕方について教えてください。**

A 他己分析のメリットは、自覚していなかった自分の姿に気付ける可能性があるというところなのではないでしょうか。自分が思っている自分の姿と、他人から見られている自分の姿は多少違うケースがありますし、何より自分の長所を自分で表現するのは意外と恥ずかしく難しいもの。自分ではたいしたことはないと思っていても、他人から見たらすごいことは結構あるものです。そこで自分のPRポイントが新しく見つかるかもしれません。私自身も経験しましたが、就職活動はひとりで行うものではありません。ぜひ色々な人と協力してみましょう。

**Q 面接での注意点を教えてください。**

A 月並みですが「質問に対して明確に答えること」です。いくら面接とは言え、相手は「人」であり求められることは人と人のコミュニケーションです。会話のキャッチボールがちゃんとできているかどうか、そこを意識してください。面接の中で非常に多いのは、自分のことをたくさん知ってもらいたいと思う気持ちが強過ぎて、「自分が話したいことを話してしまう」ケース。一概には言えませんが、例えば志望動機を聞いているのに、用意していた自己PRを延々と話してしまうというケースも多く見受けられます。自己PRも勿論大切ですが、まずは面接官の意図を汲み取り質問に対して明確かつ端的に答えるということが大切でしょう。

とは言え、緊張をしていると質問を聞き逃したり頭が真っ白になってしまうことも良くありますよね。そんな時は一度間を取って落ち着いて整理した上で答える、という方法もあります。質問されたからと言って即答しなければならないということではありません。時にはおそれずに「一度整理してもよいでしょうか」と聞いてみることも必要です。

**Q 理系の学生は就職活動において、理系の強みをどう生かすことができますか。**

A 現在様々な企業で、PLAN（計画）→DO（実行）→SEE（検証）の思考が注目されています。理系学生は研究や実験の過程で、計画と仮説を立て、実証をして、振り返り次に生かしていくというプロセスを経験してきていますので、このPDSの思考が自然と身についているケースが多いのではと私は考えます。

また、今学んでいる専門分野と将来目指す仕事が結びつき易く、将来像が明確にイメージし易いという強みもあると思います。

**Q 企業はどういう人材を求めていますか。**

A 先程のPDSの志向はもちろんですが、それに加えて「学ぶ姿勢を持つ人材」だと思います。ただ単純にデスクに向かって考え続けることだけが学ぶ姿勢ではありません。社会では、自分と年齢の近い若手人材もいれば、今まで出会ったことのないようなベテラン層まで、様々な人たちと協力して働きます。きちんとパフォーマンスを発揮できる人材になるためにも、仕事を円滑に進めていくためにも、色々な人にアドバイスを求め、吸収する姿勢をまずはきちんと示すことが大切になってくるのではないでしょうか。

新卒採用の特性上、入社後すぐに高いパフォーマンスを求められることや、結果を出さなければいけないということはほとんどありません。始めはたくさん失敗もするでしょうし悩むことも多いかと思いますが、そんな時こそ腐らず偉大な先輩たちの助言を得ながら経験を糧として欲しいです。

▲取材に協力していただいた大谷さん